

# ヨーロッパにとってのスペイン、 スペインにとってのヨーロッパ

アンパロ・ロサーノ・マネイロ

## 1. はじめに——ヨーロッパという観念

あらゆることを問題化してしまうという明らかな傾向がある我々ヨーロッパ出身の人間は、ヨーロッパについて話すときもおそらく我々しきしないであろう問いかけから始める。すなわち「ヨーロッパとは何か？」というものだ。この問いかけには意味がある。というのもヨーロッパは、地理的尺度によっても歴史的・文化的根拠によっても定義し得ないからである。言い換えればヨーロッパとは、この地のある偉大なヨーロッパの歴史家が述べたように「文化、共通する行動、理念の数々、しばしば別のかたちではあるが、共通に得てきた歴史的体験」<sup>1)</sup>なのである。

ヨーロッパとは歴史の結果である。何世紀にもわたるその歴史のなかでスペインは非常に際立った役割を果たしてきた。しかしながら、後に具体的に述べるが、ある瞬間からスペインはヨーロッパから離れて、その共通の歴史の外に身を置くようになる。再び組み込まれたのは、つい最近のことに過ぎない。そのことが我々をして、スペイン人でありながらも、どこか異なるヨーロッパ人にさせるのである。我々がヨーロッパ人であるのは文化的アイデンティティ、つまりヨーロッパ的なものの思想を共有するがゆえであって、これは2つのプロセスの中で形成されていった。1つは、それぞれの人民と歴史の時代がこのアイデンティティに対してもたらしてきたものの集積により、もう1つは、他の民族や文化との対比によるものである。すなわち自らをヨーロッパの人間と感じるの、そうでない人びとは異なると見なすからである。

さて、1つめの蓄積のプロセスはギリシャから始まる。ヨーロッパの民主

義、哲学、人間というものに関するひとつの明確な概念に加え、その名称までもがギリシャに起因する。この名称は、ヨーロッパのあらゆる世代の芸術家たちが表現してきたギリシャ神話に由来するのである。

神話によれば、エウロパ（訳注：ヨーロッパの語源）は現在のレバノンに当たるフェニキアの都市ティルス王であるアゲノールの娘である一人の王女であった。ギリシャの神々の父ゼウスは彼女に恋をし、白い牡牛に姿を変え、彼女をさらってギリシャのクレタ島に連れ去る。兄のカドモスは彼女を探し求めてギリシャに住み着き、彼こそがギリシャ人たちに金属の精錬とアルファベットを伝えたのであった。神話に従って、ヨーロッパの歴史が暴力や誘拐で始まるという点に着目すると興味深い。というのも、ヨーロッパの歴史は悲しいかな、何世紀もの間、支配権を争った国々の幾たびもの戦争や対立によって際立っているからである。また現実のヨーロッパは、ヨーロッパの外の小アジアで誕生し、文字や初期の技術はアジア人に負っているという点も、神話と合致している点で興味深い。

ギリシャを皮切りに、それぞれの人民、それぞれの国家がヨーロッパという観念の中に何か決定的なものを残し、それによって、フランスの詩人ポール・ヴァレリーがしたように、ヨーロッパの人びとを定義することが可能になったのである——すなわち、それは、「ローマの子、キリスト教徒、そしてギリシャの後継者」である。

## 2. ヨーロッパのなかのスペイン

さて、スペインがこの歴史的プロセスの中で果たした役割は実に大きい。ギリシャ人は現在我々の半島が占める領土をイベリアと呼び、ローマ人はヒスパニアと名付けていた。興味深いことに、ヨーロッパと同じくスペインの名もおそらくフェニキア起源と思われる。つまり「ウサギの地」を意味すると言う者もあれば、「隠れた地」と解釈する詩的な見方も存在する。当時知られていた世界の西端に位置するこの半島は、ローマ人に征服され完全にローマ化した。すなわちその言語であるラテン語、法、政治体制を受容したのである。ローマ帝国の崩壊とともにスペインは、当時もっとも進歩的だったゲルマン民族であ

り<sup>2)</sup>、賢人ゴートとも呼ばれた西ゴート族に侵略された。以来、総じて見れば、中世を通じてスペインはヨーロッパと同じ運命をたどった。さらには、この時期におけるヨーロッパの本質を成す部分であった。7世紀のイギリスの歴史家ベダ・ヴェネラビリス (Beda el Venerable) (675-755) によれば、ヨーロッパはガリア、ゲルマニア、エスパニヤ (スペイン) で構成されていたが、ド・ルージュモン (De Rougemont) が指摘するように、イギリス人自身がそれを主張し、イギリスとスカンジナビアを除外するのである<sup>3)</sup>。

この歴史的段階において、ヨーロッパ——それはヨーロッパを有するイスパニア (Hispania con ella) ということであるが——は、封建主義の独自の政治的分裂にもかかわらず、キリスト教のなかにその一体性を見出すことになる<sup>4)</sup>。そこに住む様々に異なる人びとは自らをキリスト教徒と認識し、それぞれに違いはあっても、キリストが生き、そして逝った地であるエルサレムと聖地の数々をあらためて奪還しようと、十字軍に集結した。ヨーロッパを侵略するイスラム教徒と闘うための共同の軍隊を組織し、彼らはやがて完膚なきまでにスペインによって打ち負かされることになる。事実、ド・ルージュモンによれば、「……歴史的で政治的なヨーロッパ誕生の記録として見なしうる決定的に重要な文書」<sup>5)</sup>は754年のいわゆる『モサラベ年代記』であるが、そのなかで氏名不詳の年代記作家 (クロニスタ) は、カール・マルテルがアラブ人を破ったボワティエの戦いについて語っている。この作者はヨーロッパ各地から集結した兵士たちを指して「ヨーロッパ人」という用語を使っている。原文に従えば、「……夜明けにヨーロッパ人 (*Europenses*) たちは、アラブ人に対する攻撃に備え、軍営の在る天幕を整えたのである」<sup>6)</sup>。

キリスト教と一体化するヨーロッパの意識は、実際には17世紀まで及ぶが、政治的状況はすでに非常に異なるものであった。その時代のヨーロッパは5つの大国——イタリア、ドイツ、フランス、スペイン、イギリス——によって形成されていた。これらの大国の間では、ヨーロッパ大陸の支配権と1492年のスペインによるアメリカ大陸発見をきっかけとして征服された新たな領土をめぐる争われることになる。スペインは、しばしば「日の沈むことのない ("nunca se ponía el sol")」と形容されるような大帝国へと変貌していく。この

意味で、よく知られた16世紀の「ヨーロッパ——乙女の形をした地上で最初の場所（*Europa Prima Pars Terrae in Forma Virginis*）」と題する版画が、スペインを頭部にした少女として示しているのは、意味深長である<sup>7)</sup>。

政治・軍事的観点からすれば、当時のスペインはヨーロッパの大国のひとつである。しかも、ここで取り上げた数世紀にわたり、スペインはヨーロッパに対して、ヨーロッパを特徴づけるような非常に多くの要素を提供したてきた。というのも、例えば、スペインはイスラム教徒を打倒し、ヨーロッパ大陸から駆逐した。この再征服がなければ、ヨーロッパは今日イスラムの領土だったかも知れない。しかし、それと同時に、スペインはやがてヨーロッパに輸出することになるアラブ文化を統合する過程を実際にたどった。例えば、ローマ数字がアラビアの十進法にとって代わられたのは、スペインのとある小さな修道院がアル＝フワーリズミー（Al-Kwarizmi）のアラビア数学の専門書を保管しており、その翻訳のために当時の有名な神学者であり数学者であったオーリヤックのジェルベール（Gerberto de Aurillac）に渡されたからであるが、この人物がのちのローマ教皇シルヴェステル2世（Silvestre II）である。ヨーロッパが代数学と微積分を発展させた可能性は、以上のことに依っているのである。

ヨーロッパと世界は、国際法（万民法）の萌芽、光と影——黒い伝説（中南米におけるスペインの蛮行を追及する言説——訳注）が責を帰すほどの影ではない——を伴うアメリカ大陸の発見もまた、スペインに負っている。多くの人びとに対する布教は基本的にはイエズス会の成果であるが、これによって、信仰に加え、世界の多くの地域にヨーロッパの文化や科学がもたらされた。スペイン研究者エリオット（Elliott）によれば、スペインは「驚くべき数十年の間に、地球上の最大の権力となる。その数十年の間は、ヨーロッパの所有者にほかならず、海外の膨大な領土を植民地化して、当時の時点で知られていた世界の最大——かつ最も広範囲にわたる——帝国を治めるための統治システムを考案し、ヨーロッパの文化的な伝統にかつてないほどの唯一の寄与となるような新たな型の文明を生み出すことになるのである」<sup>8)</sup>。

そして、9世紀（813年）のコンポステーラでの使徒サンティアゴの墓の発見に触れないわけにはいくまい。これによって西洋で最大の民衆の移動のひとつ

つが開始される<sup>9)</sup>。すなわち、それがサンティアゴの道の巡礼であるが、これはいみじくも「ヨーロッパの道」と定義できるだろう。というのも、この道を介して、当時のヨーロッパの芸術や文化が普及するからである。こうして、ロマネスク様式、のちのゴシック様式の芸術は、ヨーロッパ大陸中に広まっていたのである<sup>10)</sup>。

### 3. ヨーロッパなきスペイン

19世紀には、誰の目にも明らかなヨーロッパにおけるこのスペインの中心的地位（protagonismo）に翳りが見え始める<sup>11)</sup>。当時すでにヨーロッパの中心的地位にいたのはフランスであり、そこではフランス革命が絶対君主制に終止符を打ち、国家を世俗化する。啓蒙主義者たちはヨーロッパを文化的に一体化した偉大な市民的な団体、すなわち政治的には多くの国家に分かれているものの、ヨーロッパ的な均衡の原理（doctrina del equilibrio europeo）に基づく公法を共通のものとする文豪の集合体（República de las letras）とみなしていた<sup>12)</sup>。しかも啓蒙主義者のなかには、この文化的一体性が政治的な一体性にもなるべきだと夢想する者もいた<sup>13)</sup>。

一方、スペインは相変わらず君主制をとりカトリックの国であった（1812年にカディスで発布された最初のスペイン憲法でさえ、カトリック教は唯一の真の宗教であると宣言していた）。わずかではあるが、スペイン人啓蒙主義者のなかには連邦制の構想に名を連ねる者もいた。たとえばホベリャノス（Jovellanos）は、連邦制のヨーロッパを建設するための道としての教育を提案している<sup>14)</sup>。

さらにスペインは、ヨーロッパから離れるだけでなく、ヨーロッパとしてのアイデンティティを部分的にも失うことになる。他のヨーロッパの国々ではナポレオンの敗北は国民的アイデンティティを強化するロマン主義的なナショナリズムの契機となるが、それは、第一次世界大戦へと連動する過度のナショナリズムの出現という否定的な帰結を伴いながらも、市民が国家とその象徴、国歌、国旗、そして文化との強力な一体性を抱く端緒となる、という肯定的な側面も持ち併せていた。

このようなことは、スペインでは起こらなかった。ナポレオンの敗北は、最初の段階でこそ愛国心を発揚する民衆運動のかたちをとるものの、カディス憲法を廃止し、自由主義者たちを迫害したフェルナンド7世の絶対主義的な時代のなかで結末を迎えることになる。それ以来、軍事クーデタは勃発し、いくつかの異なる摂政を経て、スペイン第1共和制へと至る。スペインの最大の政治的不安定性の時期であり、「脆い憲法政治体制期（constitucionalismo vulnerable）」<sup>15)</sup>と定義しうるような局面を迎えることになる。しかも、スペインは貧しく、立ち遅れた、深刻な不況をさまよう国であった<sup>16)</sup>。

スペイン植民地大帝国なるものは瓦解した。こうした状況下で、1898年にはアメリカがキューバの独立を支援したことに端を発する米西戦争は終結する。スペインの敗北は、その時点まではスペインの植民地であったキューバ、プエルトリコ、フィリピン諸島を失うことを意味した。中南米のスペイン植民地がすでに独立を果たしていたことから、スペイン帝国はほぼ完全に消滅することになる。

植民地の喪失はスペイン人のトラウマとなった。国は深い陰鬱と無気力の状態に陥った。こうした状態を反映するものが、深い悲観主義によって特徴づけられた政治家や知識人のグループである、いわゆる98年世代であった。この世代の最も重要な人物のひとりであったミゲル・デ・ウナムノ（Miguel de Unamuno）は、「私にはスペインが痛々しく感じられる」と述べることになるが、これは時代の空気を映し出す叫びであった。加えて、98年世代はヨーロッパやヨーロッパ的なものを峻拒した。つまり、彼らはスペインを再生することを欲したものの、今日スペインが置かれている危機的状況から脱するためには、スペインの歴史的かつ精神的なルーツにまで立ち返るべきであると考えていた。こうしてスペインは、彼らが、技術のこののみを考え、啓蒙時代の遺制たる実証主義と科学至上主義——それは技術のこののみに目を向け、そうであるだけに腐敗している——にどっぷりと浸かっているとみなしていたヨーロッパから距離を置くことになる。このようにして、スペインをヨーロッパに接近させる代わりに、ヨーロッパをスペイン化することが必要であると考えていたが、実際、これが著書『ドン・キホーテとサンチョの生涯』で提示されている

ウナムノの立場であった<sup>17)</sup>。

彼らの後続世代はヨーロッパに関する見方を完全に変え、ヨーロッパのなかにこそスペインの危機の解決の糸口があると見ていた。そのようにして、当時の偉大なスペイン人の哲学者オルテガ・イ・ガセット (Ortega y Gasset) は次のように述べた——「スペインが問題であり、ヨーロッパは解決である」<sup>18)</sup>。この世代のスペイン人は、スペインをヨーロッパ化することなしに、スペインの再生は不可能であると考えていた。事実、オルテガと彼の世代は、超国家すなわち国民国家としての一つのヨーロッパ (una Europa – Nación) へとヨーロッパ諸国の統合をめざす時代のヨーロッパ主義の運動に加わっていくのである<sup>19)</sup>。しかしながら、救いの道としてのヨーロッパに対するこうした見方は、第一次世界大戦後に崩れる。このおぞましい戦争の結果、ヨーロッパは瓦解し、困窮状態に陥ることになる。900万人ものヨーロッパ市民が死亡し、戦争を終結させたヴェルサイユ条約によって敗戦国として汚辱を味わったドイツは、平和に対する脅威であり続けていた。それゆえヨーロッパでは、第1次世界大戦後に新たな紛争を回避する唯一の可能性として、ヨーロッパの国家連合によるひとつの連邦国家の創設をめざす膨大な数のヨーロッパ主義の運動や政党の出現を目の当たりにすることになる<sup>20)</sup>。とはいえ、戦争から間もないヨーロッパ各国は、新たな超国家へと溶け込んでいく用意はなかった。これらの国家間において、20世紀の2番目に激しい世界的規模での衝突へと道を開く対立が再び起こることになる。

#### 4. スペインとヨーロッパ——大きすぎた決裂

如上のヨーロッパとスペインの間の距離は、第2次世界大戦後に正真正銘の断絶へと化す。この戦争の数年前の1936年、スペインでは共和主義者と反対派たちとの間で内戦が勃発する。3年後、反対派が勝利することで、フランコ将軍が率いる長きにわたる軍事独裁の時代の幕が切って落とされた。同胞同士が戦う自らの戦争によって瓦解したスペインは、第2次世界大戦には参加しなかったものの、フランコがナチズムやファシズムに親近感を抱いていたのは明らかであった。フランコはこれらを支持し、双方から支援を得ていた。

したがって第2次世界大戦が終わると、スペインは再びここ数世紀のヨーロッパ史にとって最も重要な出来事から取り残されることになる。それが、1952年の欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）と、それに続く1957年に生まれる2つの共同体——欧州経済共同体（EEC）と欧州原子力共同体（EAEC）——である。このようにしてヨーロッパの統合のプロセスが開始され、今日我々が欧州連合として知るものへと接続していくのであるが、これはイギリスの国民投票後、現在、27か国と5億人のヨーロッパ市民を抱えている。

最初の欧州共同体（ECES）は、第一義的にはドイツに向けられていたものの、ヨーロッパのすべての民主主義国に開かれたかたちで、フランスによるひとつの提案から生まれた。したがってスペインは、この偉大なる構想の始まりの段階から排除されていたのであるが、それは、独裁であることと、経済的にも政治的にも完全に自己完結（*autarquía económica y política*）していたがゆえに、国際的に孤立した時期に置かれていたことに由る。

フランスの提案が第2次世界大戦後、ヨーロッパの諸問題に対する解決策となる。勝者も敗者も含めすべてのヨーロッパ諸国が困窮し、相互の市場も閉ざされていた。しかもこの貧しきヨーロッパは、自らの国際的に重要な地位（*relevancia internacional*）を失う。その時までは世界史はヨーロッパ中心的なものであったといえるが、今や世界は2人の競技者しかいないチェス盤と化す——ソ連とアメリカである。ヨーロッパもまた、内部の深刻な問題に直面する。つまり、フランスとドイツの間のルサンチマンは解消されず、ドイツは戦争に負け、それゆえに自国経済の重要な地域——とりわけルール地方すなわち国際的管理下に置かれた石炭と鉄鋼生産地帯——を失ったのである。連合国はこの地をどうして良いのかわからなかった。それをドイツに返還することは、軍事産業のために利用される危険を冒すことを意味した。フランスはこの危険を冒すことを拒否する。ドイツへ返還しないことは、この国に屈辱感を抱かせたまま、怨嗟を生み出すことを意味していた。

ヨーロッパが対応に苦慮する深刻な問題を前に、同胞殺しの戦いを回避し、旧大陸に国際的な場面でのかつての重要性を戻し得るようなヨーロッパ諸国家の1つの統合体を考えることが、ますます明らかになってきた。実際、



この統合体は異なる提案を通して、追求されていくことになる——1つは直接的な政治統合であり<sup>21)</sup>、他の1つは防衛的統合であるが（いずれも頓挫する）<sup>22)</sup>、最後にもう1つ、ヨーロッパ統合のプロセスへの端緒となる経済統合である。

最初のヨーロッパの共同体創設へと導いた発想は、2人のフランス人——ジャン・モネ（Jean Monnet）とロベール・シューマン（Robert Schuman）——に依る。彼らは、いっせいに自らの主権を譲渡し、1つの連邦国家へと解消する旨を、ヨーロッパの国々に説得することは不可能である点から発して考えた。それゆえ、漸次そして分野ごとに主権を移譲する可能性を提示した。すなわち、最も問題性を孕む石炭と鉄鋼の分野から始めて、最終的には主権の完全な譲渡とヨーロッパ連邦国家の創設へと至るというものである<sup>23)</sup>。つまりこれは、最初にルール地方および石炭と鉄鋼の問題を解決するということである。この地をドイツに返還するか、あるいは占領し続けるかどうかの疑義に対して、どちらか一方ということではなく、すなわちドイツでも連合国でもなく、フランスとドイツ、それに望めば他の国々も参加するようなヨーロッパの機関の創設に向け、この機関に対して、全加盟国の石炭と鉄鋼の生産を共同管理するための独立した組織を置くことを決定したのである。この機関が欧州石炭鉄鋼共同体（CECA）であり、最初の欧州共同体である。

この共同体の創設は普通では考えられないほどの出来事であったが、それは、その淵源に「聖なる赦しの行為（“un bendito acto de perdón”）」と呼ばれたものを持っていたからである。戦争の傷口がなお開いたままの時に、フランス人たちは自らの宿敵であるドイツ人に手を差し伸べたのである。

この構想の勝利は、こうした冒険的試みに乗り出すことを決意した国々の前面に立ち、ヨーロッパ創設の父（Padres de Europa）——（この構想のフランス人発案者である）ジャン・モネ、アデナウアー（ドイツ外相）、デ・ガスペリ（De Gasperi）（イタリア首相）——とされる者たちの、人間的で政治的な資質に負っている。彼らの経歴も大いに関係している。つまり、シューマンと同様にデ・ガスペリも越境者であり、戦争ゆえに国籍を変更した者たちである。第1次世界大戦まで、シューマンはドイツ人であったし、デ・ガスペリはオース

トリア国籍で、両者の母語はアデナウアーと同様のドイツ語であったが、加えて3名とも、ヨーロッパの人びとの間における赦しと連帯のみがヨーロッパを救うとの信念をもったカトリック系キリスト教民主主義者であった、という共通点をもっていた。この構想の重要性はひょっとすると、フランスの提案に対するアデナウアーの回答に、より明確に見て取れるかも知れない。アデナウアーは自国で政治的重職を歴任した高齢の人物であったが、彼は次のように答えたのであった——「ミスター・モネ、フランス側の提案を実現することは、私を待ち受ける最重要の課題と理解しています。これを実行に移せば、私は人生を無駄にしたわけではないと思います」<sup>24)</sup>。

## 5. スペインとヨーロッパ、ふたたび

この構想が開始される一方で、スペインは完全に孤立したままで、経済的かつ政治的な自己完結の世界を生きており、正真正銘の貧困状況にあった。おそらく、その孤立さを最も可視的に示すイメージは鉄道路線であろう。19世紀に始まって以来、スペインの線路はヨーロッパ諸国の路線とは異なる幅のものであった。何十年もの間、国境へ到着すると、ヨーロッパからの電車を降りて、スペインの電車に乗り換えなければならなかった。明らかに、スペインはヨーロッパではなかった。

1960年代頃には、スペインでは独裁が続いていたが、ほんのわずかではあるが外に開かれるようになり、したがってスペイン政府は1962年に欧州共同体への加盟申請をする。定期的に加入の申請を繰り返しておこなった。共同体は常に、スペインは民主主義国家ではないという理由で、否定的な回答をした。他方では、加入の申請をする一方で、民主主義やヨーロッパ主義の思想の持ち主であるスペイン人を取り締まっていた。例えば、(1962年6月8日に) ミュンヘンで開催された第6回ヨーロッパ統一運動大会 (Congreso del Movimiento Europeo) に参加し、フランコ体制が『ミュンヘンの共謀 (Contubernio de Múnich)』と名づけた——それによって反フランコ体制の性格をもつ共謀罪だと理解された——スペイン代表者たちを逮捕し投獄した。

フランコ体制末期には、スペインとヨーロッパの間に最も大きな溝が生じ

た。フランコが死の淵をさまよっていた1975年、ローマ教皇と欧州共同体加盟国が寛大な対応 (clemencia) を求めているにもかかわらず、スペイン政府はテロ組織の5名のメンバーを処刑した。これがスペインで死刑が適用された最後であった。このとき、あらためて、スペインの国際的な孤立化が生じ、ヨーロッパの国々は自国の大使を召還し、国連加盟国としてのスペインの資格を停止する可能性がもち出されるほどの事態となった<sup>25)</sup>。

数カ月後、フランコ将軍が死去し、民政移管が始まる。わずか数年でスペインは独裁から社会民主主義の法治国家を形成することになる<sup>26)</sup>。欧州共同体への加盟も可能になり、交渉が始まった。この同じ時期に、ギリシャとポルトガルの加盟申請がおこなわれた。これらの3カ国は、長い独裁を脱し、なお未熟で不安定な民主主義国家であった。

スペインでは政治的不安定さは明らかで、そのことは1981年の失敗に終わったクーデタやそれに続いた他のクーデタを考えれば充分わかるが、しかしそれに加えて、その時期は、バスク民族主義グループETAのテロ攻撃も日常の出来事となっていた。事実、マドリッドで欧州共同体へのスペイン加盟が署名された1985年6月12日のまさにその朝に、テロ組織ETAは同市内で3名の軍人を殺害し、駐車場に爆弾を置いて、爆発物処理班の1名の命を奪った。攻撃の客観的な危険性があるにもかかわらず、共同体加盟国の11人の首相がマドリッドに降り立ったことは、スペインの芽生えたばかりの民主主義に対するヨーロッパの連帯の表明であった。

スペインへの連帯は経済的観点からも述べることができる。ギリシャ、スペイン、ポルトガルは当時、貧しい国であった。すでに共同体に加盟していた9カ国は、これらの新規加盟3カ国の経済的かつ社会的な水準を上げるべく、財政的に連帯のための多大な努力をおこなうことになる。スペインがEUに加盟してからの30年間、ヨーロッパは1,500億ユーロを投資してきた。1986年から今日まで、国内総生産は倍増した。1985年にはヨーロッパ平均の72%だった国民1人あたりの収入は、今日94%である。貿易に関しては、総輸出量は8倍になり、EU内外からの輸入量は7倍に増えた<sup>27)</sup>。そして、再び鉄道路線を引き合いに出すと、スペイン高速鉄道AVEが国境で停車することなくマド

リーダー間をつないでいるだけでなく、加えてスペインは、国際的な高速鉄道のランキングで、今や日本、韓国、中国、フランスに続いて第5位につけ、ドイツ、イタリア、オーストリアの上位にある。

また、スペインは文化的にヨーロッパに組み込まれただけではなく、人びとの魅力を惹きつけてやまない地（*polo de atracción*）へと変貌している。フランコ体制下でヨーロッパを旅した数少ないスペイン人は、非民主的で遅れた国の人間であることを恥じていたものだった。ところが今、現代のスペイン人は胸を張って世界中を旅しているだけでなく、スペインは自国内の大学で学びたいと望む多数の留学生をヨーロッパから受け入れている。事実、スペインはヨーロッパの学生が好む国であり、年間4万人以上の留学生がスペイン国内で学んでいる。

## 6. おわりに

スペインとヨーロッパの運命は再び結びつき、スペインは経済的な意味での平和と福祉のためのヨーロッパ統合の構想に加わってきた。それは今日、イギリスのブレグジット（Brexit：イギリスのEU脱退——訳注）、移民、経済危機の問題ゆえに困難な時期に構想である。しかし欧州連合なお、ヨーロッパとスペインを変えた偉大なる構想であり続けている<sup>28)</sup>。もはやヨーロッパの人間同士での戦争がないというだけでなく、軍隊の役割が変わり、今や平和と人道支援のための部隊となっている。

19世紀スペインの悲観主義、独裁の40年、カタルーニャとバスクの民族主義の問題は、確かに、スペイン人の心に傷を残した。一部のスペイン人の、スペイン国家、国旗、国歌や文化との一体感は、ヨーロッパの他の国々より少ない。イタリア人、フランス人、イギリス人は自国の歴史、文学、芸術に誇りを持っている。これに対して、スペイン人はおそらく、自分たちがヨーロッパと世界にもたらしたものを自覚していない。つまり、我々が世界の政治的かつ文化的な発展に寄与した多くのことがらのうちのいくつかだけを引用しても、我々の言語は世界で5億人によって話され、スペインはヨーロッパ初となる議会（*Parlamento*）を打ち立て、新大陸の発見を実現し、ドン・キホーテという

普遍的人間像を世に知らしめた。ヨーロッパのなかに深くとけ込んだと実感する今日、我々スペイン人にはひとつの大きな課題がある——それは、ヨーロッパの人間でありつつも、偉大な国民であったし、現にそうであるという誇りを取り戻すことである。

## 注

- 1) BRUGMANS, H.: *La idea de Europa 1920–1970*, Ed. Moneda y Crédito, Madrid, 1992.
- 2) SUAREZ, L.: *Lo que el mundo le debe a España*, Ariel Barcelona, 2009, p. 7.
- 3) DE ROUGEMONT, D.: *Tres milenios de Europa: la conciencia europea a través de los textos*, Veintisieteletas, Madrid, 2007, p. 67.
- 4) 実際に「キリスト教の中核的役割」がより明らかになったのは中世である。  
AHIJADO QUINTILLÁN, M.: *Historia de la unidad europea*, Pirámide, Madrid, 2000, p. 47.
- 5) DE ROUGEMONT, D.: *Tres milenios de Europa: la conciencia europea a través de los textos*, *op. cit.*, p. 65.
- 6) Ídem, p. 6.
- 7) もうひとつの例として、「ヨーロッパ」と呼ばれる戯曲を挙げる。リシュリユー (Richelieu) 枢機卿 (17世紀) 作とされる、30年戦争を背景に書かれた作品だ。そのなかでヨーロッパ姫は、邪悪なイベロと呼ばれるスペイン人に言い寄られる。イベロは姫をわがものにしようとするが、あなたはすでに妹アメリカを征服したではありませんかと言ってヨーロッパは求婚を断り、勇敢なフランシオン、すなわちフランスに助けを乞う。フランシオンはイベロと対決して姫を救い、平和を保証した。  
GUTIERREZ CONTRERAS, F.: *Europa la historia de una idea*, Salvat, Pamplona, 1987, p. 42.
- 8) AYLLÓN, JR.: *Los Pilares de Europa, Historia y Filosofía de Occidente*, EUNSA, Pamplona, 2013, p. 131.
- 9) ROMERO POSE, E.: *Raíces cristianas de Europa*, San Pablo, Madrid, p. 194.
- 10) 「国王や聖人たちが奨励し、ヨーロッパを結ぶ動脈、街道を通して調和のとれたキョウィタス (都市) とソキエタス (社会) の創造的な交流という血が活発に通り始める。エル・カミーノ (道) ——サンティアゴとその墓——の強い統合力が、人間を育て高めるもの、すなわち文化を創造し伝える。サンティアゴ信仰は精神の品格を高める」同上、p. 182.
- 11) スペインの啓蒙主義が独特の性格を帯びているのには多くの理由があるが、基本的には、他の国々と違ってスペインの啓蒙主義者たちは君主制支持者であり、さらにスペインでは国王が当時計画された改革の推進者であることが大きい。PÉREZ

- FERNÁNDEZ-TURÉGANO, C.: *Las propuestas de los reformistas Ilustrados*, En *Reformistas y reformas en la Administración Española*, INAP, Madrid, 2015, pp. 14 y ss.
- 12) 啓蒙主義におけるヨーロッパの思想については、VOYENNE, B.: *Historia de la idea europea*, *Historia de la idea europea*, Ed. Labor, Barcelona, pp. 91–110 y DE ROUGEMONT, D.: *Tres milenios de Europa: la conciencia europea a través de los textos*, *op. cit.*, pp. 145–191.
- 13) よく知られたものは、I・カントの著作、*Sobre la paz perpetua*, Madrid, Alianza, 2002 [カント著 (宇都宮芳明訳) 『永遠平和のために』 (岩波文庫、1985年)] がある。
- 14) DE ROUGEMONT, D.: *Tres milenios de Europa: la conciencia europea a través de los textos*, *op. cit.*, p. 176.
- 15) Ídem.
- 16) たとえば1860年には、成人人口の85%が非識字だった。GARCÍA DE CORTAZAR, F y GONZÁLEZ VEGA, JM. *Breve historia de España*, Alianza ed. Madrid, 2015, p. 426.
- 17) UNAMUNO, M.: *Vida de Don Quijote y Sancho*, Alianza Ed., Madrid, 2004 [M・ウナムーノ (A・マタイス／佐々木孝訳) 『ドン・キホーテとサンチョの生涯 ウナムーノ著作集(2)』 (法政大学出版局、1972年)].
- 18) この非常に有名で引用されることの多い言葉は、オルテガ・イ・ガセットが1910年にビルバオの講演で述べた。
- 19) ORTEGA Y GASSET, J.: *La rebelión de las masas*, Madrid, Alianza Ed. 1983. [オルテガ・イ・ガセット (神吉敏三訳) 『大衆の反逆』 (ちくま学芸文庫、1995年)].
- 20) 最も重要な運動は日本人を母に持つクーデンホーフ＝カレルギー (Coudenhove-Kalergi) 伯爵が創設した汎ヨーロッパ連合で、ヨーロッパ各国をまさに連邦制により結びつけることを企図したものだ。1926年、第1回汎ヨーロッパ会議が開催された。ヨーロッパで起こったこの運動にはフロイト (Freud)、アインシュタイン (Einstein)、トーマス・マン (T. Mann)、ウナムーノ、オルテガ、マダリアーガ (Madariaga)、アデナウアー (Adenauer) といった著名人たちが参加していた。
- 21) 戦間期の連邦主義運動により召集された1948年ハーグ会議のことである。ヨーロッパ合衆国をつくるというのがその思想であった。実現はしなかったが、そのときすでに欧州の人々は、ヨーロッパの団結なくして平和はないということをはっきりわかっていた。フランス首相ポール・ラマディエ (Paul Ramadier) が会議での演説の結びとした「ヨーロッパか、さもなくば死か! (“¡Europa o Muerte!”)」という言葉はそのことを鮮明に表している。MARTÍN DE LA TORRE, V.: *Europa, un salto a lo desconocido*, Ed. encuentro, Madrid, 2015, p. 27.
- 22) 第2次世界大戦後に始まる二極主義の風潮のなかで、ヨーロッパはソビエト連邦に脅威を感じていた。複数の国が確実に共同防衛をするために団結し、この防御のため

のつながりが、将来的な政治的統合をもたらすと考えていた。1954年に誕生したWEU（西ヨーロッパ連合）の当初の目的はヨーロッパでヨーロッパ防衛機構をつくることだったが、1949年にNATOが創設されたため、その目的自体は頓挫していた。

- 23) この最初の共同体で最も重要なことは統合という新しい思想に基づいていたことである。結合の基礎は共通する経済基盤の確立である。従って第一歩は経済統合になる。この新しい手法は機能主義の名で知られ、その解釈について、R・シューマンは1950年5月9日の声明で以下のように述べた。すなわちヨーロッパは一日にして成るのではなく、石炭と鉄鋼の生産を共有することから始め、的確に成果を積み上げていくことで実現する。これらの成果が、次々と支配権を的確に超国家的組織側に譲与していくことにつながる。そしてこの支配権の共有が最終的にヨーロッパ連邦の基礎をつくることになるのだ。
- 24) ADENAUER, Konrad, *Memorias 1945–1953*. Ed. Rial, Madrid 1965, p. 99 [コンラート・アデナウアー（佐瀬昌盛訳）『アデナウアー回顧録〈第1〉』（河出書房、1968年）].
- 25) スペインのヨーロッパへの統合の進捗という観点から見たこの時期については VILLAR, F.: “Del aislamiento a la influencia en 20 años”, *Política Exterior*, vol XX, mayo/junio 2016, nº 171. P. 129.
- 26) この国家モデルの解釈については BREY BLANCO, *Ideologías, transición política en España y Constitución*, ADI Madrid, 1998.
- 27) [http://ec.europa.eu/spain/actualidad-y-prensa/noticias/asuntos-institucionales/treinta-aniversario\\_es.htm](http://ec.europa.eu/spain/actualidad-y-prensa/noticias/asuntos-institucionales/treinta-aniversario_es.htm)
- 28) スペインに関して言えば、この30年間で「国際的な除け者から外交の特権的・優先的舞台で傑出したアクターに変わることによって孤立から国際的な影響力を備えた国になった」、VILLAR, F.: “Del aislamiento a la influencia en 20 años”, *Política Exterior*, vol XX, mayo/junio 2016, nº 171. P. 136.

# España Para Europa, Europa Para España

Amparo Lozano Maneiro

## **I. Introducción: la idea de Europa**

Los europeos, que tenemos una cierta tendencia a problematizarlo todo, cuando hablamos de Europa partimos siempre de una pregunta que quizá nos hagamos sólo nosotros y es la de ¿qué es Europa? La pregunta tiene sentido porque Europa no se define tanto por criterios geográficos como por razones históricas y culturales. En otras palabras Europa es, como afirma un gran historiador europeo: “una cultura, un comportamiento común, unos ideales, unas experiencias históricas vividas conjuntamente si bien a menudo de forma separada”<sup>1</sup>.

Europa es el resultado de su historia. Y en esa historia durante siglos España ha tenido un papel muy relevante. Sin embargo, a partir de un determinado momento, que más adelante concretaremos, España se aparta de Europa, se queda al margen de esa historia común y, sólo en tiempos recientes ha vuelto a incorporarse a ella. Eso hace que los españoles seamos europeos pero algo diferentes. Somos europeos porque compartimos esa identidad cultural, esa idea de lo europeo, que se ha ido formando a través de dos procesos. Primero por la acumulación de lo que cada pueblo y cada época histórica ha aportado a esa identidad y, en segundo lugar por contraposición con otros pueblos y culturas: el europeo se siente tal porque se ve diferente a los que no lo son.

Pues bien, ese proceso de acumulación se inicia con Grecia a la que Europa debe la democracia, la filosofía, una determinada concepción del hombre, y además su nombre, pues éste proviene de un mito griego que han representado artistas



Europeos de todas las generaciones.

Según el mito, Europa es una princesa, la hija de Agenor, Rey de Tiro, ciudad Fenicia situada en lo que hoy es el Líbano. Zeus, el padre de los dioses griegos, se enamora de ella y, transformado en un toro blanco, la rapta y se la lleva a Creta en Grecia. Su hermano Cadmo va en su busca y se establece en Grecia, será él el que enseñará a los griegos la fundición de metales y el alfabeto. Es curioso notar cómo, según el mito, Europa ya inicia su historia con un acto de violencia, un rapto, porque la historia europea está tristemente marcada por numerosas guerras y enfrentamientos entre las naciones que se disputan su dominio durante muchos siglos. También resulta interesante la idea de que, siempre de acuerdo con el mito, Europa en realidad nace fuera de Europa, en Asia menor y le debe a un asiático la escritura y la primera técnica.

A partir de Grecia, cada pueblo, cada nación va dejando algo determinante en la idea de Europa, lo que hace posible definir al europeo como lo hizo el poeta francés Paul Valéry: “hijo de Roma, cristiano, heredero de Grecia”.

## **II. España en Europa**

Pues bien, el papel que España desempeña en ese proceso histórico es enorme. Los griegos llamaban al territorio que hoy ocupa nuestra península, Iberia, mientras que los romanos la denominaban Hispania. Curiosamente, como el de Europa, el nombre de España probablemente también tenga origen fenicio; hay quien dice que significa tierra de conejos, pero existe otra versión más poética que es la que traduce Hispania como “tierra oculta”. Esa península situada en el extremo occidental del mundo conocido de entonces fue conquistada por los romanos y totalmente romanizada: aceptó su lengua, el latín, su derecho y su organización política. A la caída del Imperio romano España fue invadida por los visigodos, el pueblo germano más adelantado de entonces<sup>2</sup>, denominados también godos sabios. Desde entonces y sintetizando mucho, España sigue el mismo destino de Europa durante la Edad Media, es más, España es una parte esencial de Europa en esa etapa histórica. Según

Beda el Venerable, historiador inglés del siglo VII (675–755), Europa estaba formada por la Galia, Germania y España y, como señala De Rougemont, es un inglés quien lo dice y excluye a Inglaterra y a Escandinavia<sup>3</sup>.

En esta etapa histórica, Europa, e Hispania con ella, encuentran su unidad a pesar de la fragmentación política propia del feudalismo en el Cristianismo<sup>4</sup>. Los distintos pueblos que la habitan se reconocen como cristianos, se unen a pesar de sus diferencias en las Cruzadas para reconquistar Jerusalén y los Santos lugares donde Cristo vivió y murió. Forman ejércitos comunes para combatir a los musulmanes que invaden Europa y que serán derrotados definitivamente por España. De hecho según De Rougemont “(...) el texto capital que se puede considerar como el acto de nacimiento de la Europa histórica y política”<sup>5</sup> es la llamada *Crónica Mozárabe* de 754 en el que un cronista anónimo narra la batalla de Poitiers (732) en la que Carlos Martell derrota a los árabes. El cronista usa el término “los europeos” para designar a los soldados procedentes de las diversas regiones europeas. Literalmente: “(...) *dilúculo prospiciunt Europenses Arabum temtoria ordinata et tabernaculorum ut fuerant castra locata.*”<sup>6</sup>.

La identificación de Europa con el Cristianismo llega prácticamente hasta el XVII, pero la situación política es ya muy diferente. En esa época Europa está ya formada por cinco grandes naciones: Italia, Alemania, Francia, España e Inglaterra. Entre ellas se disputan el dominio del Continente y de los nuevos territorios conquistados a raíz del Descubrimiento de América por parte de España en 1492. España se convertirá en ese Gran Imperio en el que como suele decirse “nunca se ponía el sol”. Es muy significativo, en este sentido, un conocido grabado del s. XVI que, bajo el título de *Europa Prima Pars Terrae in Forma Virginis*, representa a Europa como una doncella cuya cabeza es España<sup>7</sup>.

España es en ese momento una de las grandes naciones de Europa desde el punto de vista político y militar. Además, España, durante esos siglos de los que hemos hablado, ha aportado a Europa gran cantidad de elementos que la caracterizan. Así por ejemplo, España derrota a los musulmanes y los expulsa del

continente. Sin la reconquista Europa quizá sería hoy un territorio islámico. Pero, al mismo tiempo, España lleva cabo un proceso de integración de la cultura árabe que luego exportará a Europa. Así, la sustitución de los números romanos por el sistema decimal árabe fue posible porque un pequeño monasterio español conservaba el tratado matemático árabe de Al-Kwarizmi. y lo entregó para su traducción a un famoso teólogo y matemático de entonces: Gerberto de Aurillac, que llegaría a ser Papa Silvestre II. A esto debe Europa la posibilidad de avanzar en el álgebra y en el cálculo infinitesimal.

A España también le deben Europa y el mundo el embrión del derecho internacional (el derecho de gentes), el Descubrimiento de América, con sus luces y sus sombras, menos sombras de las que la leyenda negra le atribuye. Gracias a la evangelización de muchos pueblos, fundamentalmente obra de la Compañía de Jesús, además de la fe, se llevó la cultura y la ciencia europeas a muchas zonas del mundo. España según el hispanista Elliott: “durante unas pocas décadas fabulosas llegará a ser el mayor poder sobre la tierra. Durante esas décadas sería nada menos que la dueña de Europa, colonizaría enormes territorios ultramarinos, idearía un sistema de gobierno para administrar el mayor –y más disperso- imperio conocido hasta entonces en el mundo, y produciría un nuevo tipo de civilización que habría de constituir una aportación única a la tradición cultural europea”<sup>8</sup>.

Y cómo no mencionar el descubrimiento del sepulcro del Apóstol Santiago en Compostela en el siglo IX (año 813), con el que se inicia uno de los mayores movimientos de masas de Occidente<sup>9</sup>: las peregrinaciones del Camino de Santiago que bien puede ser definido como “Camino de Europa”, porque a través de él se difunden el arte y la cultura europea del momento. Así el arte románico y, después, el gótico se extienden por todo el Continente<sup>10</sup>.

### **III. España sin Europa**

Este evidente protagonismo español en Europa empieza a quebrarse en el siglo XIX<sup>11</sup>. Protagonista de Europa es ya entonces Francia, en la que la Revolución

Francesa pone fin al absolutismo monárquico y seculariza el Estado. Los Ilustrados consideran Europa como un gran cuerpo civil culturalmente unido, una especie de Republica de las letras, políticamente dividida en muchos Estados pero que tienen en común un derecho público basado sobre la doctrina del equilibrio europeo<sup>12</sup>. Además, algunos de los ilustrados soñarán también con que esa unidad cultural sea también una unidad política<sup>13</sup>.

España, en cambio, sigue siendo monárquica y católica (incluso la primera Constitución Española, promulgada en Cádiz en 1812, declaraba que la religión católica era la única verdadera). Sólo algunos, pocos, ilustrados españoles se suman a los proyectos federativos de la época. Por ejemplo, Jovellanos propone la instrucción como vía para construir una Europa federada<sup>14</sup>.

España, además, no sólo se separa de Europa sino que pierde parte de su identidad. En los demás Estados europeos la derrota de Napoleón da paso al nacionalismo romántico que refuerza la identidad nacional, con las consecuencias negativas de la aparición de un nacionalismo exacerbado que llevará a la I Guerra Mundial, pero que tuvo también un aspecto positivo, ya que se origina una gran identificación de los ciudadanos con la nación y sus símbolos, su himno, su bandera y su cultura.

En España esto no va a ocurrir. La derrota de Napoleón, que en un primer momento se traducen en un movimiento popular de exaltación patriótica, desemboca en el periodo absolutista de Fernando VII que derogó la Constitución de Cádiz y persiguió a los liberales. A partir de ahí se producen golpes militares, distintas regencias y hasta la primera República española. Es el período de mayor inestabilidad política de España, que vive en un escenario que puede definirse como “constitucionalismo vulnerable”<sup>15</sup>. Además, España es un país pobre, atrasado, inmerso en una profunda depresión económica<sup>16</sup>.

El que había sido el gran Imperio colonial español se deshace. Así, en 1898 concluye la guerra entre España y los Estados Unidos provocada por el apoyo americano a la independencia de Cuba. La derrota española supone la pérdida de

Cuba, Puerto Rico y Filipinas, hasta entonces colonias españolas. Puesto que las colonias españolas en Centroamérica y Suramérica ya se habían independizado, el Imperio español desaparece casi por completo.

La pérdida de las colonias fue traumática para los españoles. El país entra en una situación de profunda depresión y desánimo. Reflejo de esa situación es la llamada Generación del '98, un grupo de estadistas e intelectuales caracterizados por un gran pesimismo. Uno de los miembros más importantes de esa generación, Miguel de Unamuno, dirá: “me duele España”, exclamación que refleja el clima de la época. La generación del '98, además, rechaza a Europa y a lo europeo; sus miembros quieren regenerar España, pero piensan que para salir de la situación de crisis en la que se encuentra hay que volver a las raíces históricas y espirituales españolas. Se alejan así de una Europa que consideran inmersa en el positivismo y cientificismo herederos de la Ilustración, que solo piensa en la técnica y que por ello está corrompida. Así, creen que en lugar de acercar España a Europa es necesario españolizar a Europa, de hecho ésta es la tesis de Unamuno propuesta en el libro “Vida de Don Quijote y Sancho”<sup>17</sup>.

La generación que les sucede cambia completamente la perspectiva con respecto a Europa, ven en ella la solución a la crisis española. Así, el gran filósofo español de la época, Ortega y Gasset dirá : “España el problema, Europa la solución”<sup>18</sup>. Esa generación de españoles, pues, piensa que es imposible regenerar España sin europeizarla. De hecho, Ortega y su generación se suman a los movimientos europeístas de esa época, que quieren la integración de los Estados europeos en una supra Nación, una Europa -Nación<sup>19</sup>. Sin embargo esa visión de Europa como salvadora quiebra tras la I Guerra Mundial. De esa terrible guerra, Europa sale destruida y empobrecida. Nueve millones de europeos han muerto, Alemania perdedora y humillada por el Tratado de Versalles con el que finaliza la guerra sigue siendo una amenaza para la paz. Por eso en Europa se asiste a la aparición de un gran número de movimientos y partidos europeístas que tras la I Guerra Mundial ven como única posibilidad de evitar un nuevo conflicto la creación

de un Estado Federal, de unos Estados Unidos de Europa<sup>20</sup>. Sin embargo, los Estados europeos salidos de la Guerra no están dispuestos a disolverse en un nuevo Super-Estado. Vuelven los enfrentamientos entre ellos que dan lugar al segundo gran conflicto mundial del siglo XX.

#### **IV. España y Europa: la gran fractura**

La distancia entre Europa y España hasta aquí descrita se convierte en una auténtica ruptura tras la II Guerra mundial. Unos años antes de ésta, en 1936, estalla en España la guerra civil entre partidarios de la Republica y los sublevados contra ella. Tres años más tarde vencerán la guerra los sublevados inaugurándose así un largo periodo de dictadura militar presidido por el General Franco. España, destruida por su propia guerra fratricida, no participa en la II Guerra Mundial, aunque obviamente Franco simpatizaba con el nazismo y el fascismo; apoya a ambos y de ambos recibe ayuda.

Por ello, terminada la II Guerra Mundial, también se quedará al margen del acontecimiento más importante de la historia europea de los últimos siglos: la creación de la Comunidad Europea del Carbón y del Acero en 1952 (CECA), a la que seguirán en 1957 otras dos Comunidades: la Comunidad Económica Europea (CEE) y la Comunidad Europea de la Energía Atómica (CEEa). Se inicia así un proceso de integración de Europa que culmina con lo que hoy conocemos como Unión Europea, que hasta ahora abarca, tras el referéndum británico, a 27 Estados europeos y 500 millones de habitantes

Esa primera Comunidad Europea, (la CECA) nació de una propuesta francesa dirigida en primer lugar a Alemania, pero abierta a todos los países de la Europa democrática. España, por tanto, será excluida desde los orígenes de este gran proyecto ya que se halla en un periodo de aislamiento internacional por ser una dictadura y vive en una autarquía económica y política completa.

La propuesta francesa va a ser la solución a los problemas de Europa después de la II Guerra Mundial. Todos los países europeos, los vencedores y los vencidos,

están empobrecidos, sus mercados cerrados entre sí. Esa Europa pobre, además, ha perdido su relevancia internacional. Hasta entonces, casi puede decirse que la historia del mundo es eurocéntrica, ahora el mundo es un tablero de ajedrez en el que solo hay dos jugadores: los soviéticos y los americanos. Europa se enfrenta también a graves problemas internos: no se ha resuelto el resentimiento franco-alemán, Alemania ha perdido la guerra y con ella zonas importantes de su economía, sobre todo el territorio del Ruhr, es decir, la zona del carbón y de la producción de acero que está bajo control internacional. Los aliados no saben qué hacer con ese territorio: devolvérselo a Alemania supone correr el peligro de que vuelva a ser utilizado para la industria de guerra. Francia se niega a correr ese riesgo. No devolvérselo supone mantener humillada a Alemania y alimentar el rencor.

Ante los graves problemas que sufre Europa, resulta cada vez más evidente y necesario pensar en una Unión de los Estados europeos que evite las guerras fratricidas y devuelva al Viejo Continente su antigua relevancia en el panorama internacional. De hecho, esa unión se va a perseguir a través de distintas propuestas: una intenta la integración política directa<sup>21</sup>, otra intentará una integración defensiva<sup>22</sup> (ambas fracasaran), por último será la integración económica la que dará inicio al proceso de unión de Europa.

La idea que llevará a la creación de la primera Comunidad europea se debe a dos franceses: Jean Monnet y Robert Schuman. Ellos parten de que es imposible convencer a los Estados europeos de que cedan de golpe su soberanía y se disuelvan en un Estado federal. Por eso plantean la posibilidad de cederla poco a poco, sector por sector; empezando por el más problemático, el del carbón y acero, hasta llegar a la cesión total de soberanía y a la creación de una Federación Europea<sup>23</sup>. Se trata, así de resolver primero el problema del Ruhr y del carbón y acero alemán. Frente a la duda de si devolvérselo a Alemania o seguir ocupándolo, deciden que ni lo uno ni lo otro, es decir: ni para Alemania ni para los Aliados, sino para una organización europea en la que participen Francia y Alemania y los países que lo deseen, poniendo al frente de esa organización a una Autoridad independiente que gestione

en común las producciones de carbón y acero de todos los miembros. Esa organización es la CECA, la primera Comunidad Europea.

La creación de esta Comunidad es un hecho extraordinario, ya que tiene en su origen lo que se ha denominado “un bendito acto de perdón”. Los franceses tienden la mano a sus eternos enemigos, los alemanes, cuando aún están abiertas las heridas de la Guerra.

El triunfo del proyecto se debe a la calidad humana y política de los hombres que están al frente de los países que deciden embarcarse en esa aventura y que son considerados los Padres de Europa: además de Jean Monnet (el autor francés del proyecto); Robert Schuman (ministro de Asuntos Exteriores francés); Adenauer (Canciller alemán) y De Gasperi (primer ministro italiano). Sus biografías también tienen mucho que ver. Así, tanto Schuman como De Gasperi son hombres transfronterizos, han cambiado de nacionalidad por causa de la guerra. Schuman fue alemán y De Gasperi austriaco hasta la I Guerra Mundial, la lengua materna de ambos es el alemán, como la de Adenauer, pero además los tres tienen en común que son demócratas cristianos, católicos convencidos de que solo el perdón y la solidaridad entre los pueblos europeos puede salvar a Europa. La importancia del proyecto quizá se vea más claramente en la respuesta de Adenauer a la propuesta francesa. Adenauer que es ya un hombre mayor que ha ocupado los más altos puestos políticos en su país responde diciendo: “Sr. Monnet, entiendo la realización de la propuesta francesa como la tarea más importante que me aguarda. Si logro llevarla a cabo, considero que no habré malgastado mi vida”<sup>24</sup>.

## **V. El reencuentro entre España y Europa**

Mientras se pone en marcha ese proyecto, España está completamente aislada, vive en la autarquía económica y política y en una situación de auténtica pobreza. Quizá la imagen más gráfica de ese aislamiento sea la de las vías del tren. Desde sus orígenes en el siglo XIX el ferrocarril en España tiene un ancho de vías diferente del europeo. Al llegar a la frontera, durante décadas, era necesario abandonar el tren



europeo y subirse en el español. Quedaba claro que España no era Europa.

Hacia los años 60, aunque España sigue siendo una dictadura, se inicia una tímida apertura hacia el exterior, por lo que el Gobierno español solicita la entrada en la Comunidad Europea en 1962. Periódicamente repitió su solicitud de adhesión. La Comunidad responde siempre negativamente al no ser España un país democrático. Por otra parte, mientras se solicitaba la adhesión, se perseguía a los españoles que eran demócratas y europeístas. Por ejemplo, se detuvieron y encarcelaron a los representantes españoles que asistieron al VI Congreso del Movimiento Europeo celebrado en Múnich (8 de junio de 1962) y que el franquismo denominó como el “*Contubernio de Múnich*”, entendiendo con ello que se trataba de una conspiración antifranquista.

Ya a finales del régimen franquista se produjo la mayor ruptura entre España y Europa. En 1975, con Franco agonizando, el Gobierno español, a pesar de las solicitudes de clemencia del Papa y de los Estados miembros de las Comunidades Europeas, ejecutó a cinco miembros de organizaciones terroristas; ésta fue la última vez que se aplicó la pena de muerte en España. Se produjo entonces un nuevo aislamiento internacional de España, se retiraron los embajadores de los Estados europeos e incluso llegó a plantearse la posibilidad de suspender a España como miembro de la ONU<sup>25</sup>.

Pocos meses después fallece el General Franco y se inicia la Transición. En pocos años, España pasa de ser una dictadura a configurarse como un Estado social y democrático de derecho<sup>26</sup>. La adhesión a las Comunidades Europeas ya es posible y empieza a negociarse. En los mismos años solicitan también la adhesión Grecia y Portugal. Los tres nuevos países son jóvenes e inestables democracias salidas de largas dictaduras.

En España, la inestabilidad política es evidente, basta pensar en el fallido golpe de Estado de 1981 al que siguieron otras conspiraciones golpistas, pero además son años en los que los atentados terroristas del grupo nacionalista vasco ETA estaban a la orden del día. De hecho, la misma mañana del 12 de junio de 1985, en la que se

firmó en Madrid el Tratado de adhesión de España a la Comunidad Europea, la organización terrorista ETA asesinó en esta ciudad a tres militares y colocó una bomba en un parking matando a un artificiero. Que los once Jefes de Gobierno de los Estados miembros de la Comunidad aterrizasen en Madrid a pesar del peligro objetivo de atentados es una demostración de la solidaridad europea con la joven democracia española.

También puede hablarse de solidaridad con España desde el punto de vista económico. Grecia, España y Portugal son entonces países pobres. Los nueve países que ya formaban parte de la Comunidad harán un enorme esfuerzo de solidaridad financiera para elevar el nivel económico y social de estos tres nuevos países. Así, en los treinta años que España lleva en la Unión Europea, ésta ha invertido más de 150 000 millones de euros. Desde 1986 hasta hoy el producto interior bruto se ha doblado. La renta *per capita* que en 1985 era del 72% de la media europea, está hoy en el 94%. En relación con el comercio ha multiplicado por ocho su volumen total de exportaciones totales, y ha multiplicado por siete su volumen de importaciones tanto de dentro como de fuera de la UE<sup>27</sup>. Y, para seguir con la metáfora de las vías de tren, hoy no solo el AVE, tren de alta velocidad española, conecta Madrid con París sin parar en la frontera, sino que, además España ocupa el quinto lugar en el ranking internacional de trenes de alta velocidad, por detrás de Japón, Corea del Sur, China y Francia y por delante de Alemania, Italia o Austria.

Asimismo, España no sólo se ha incorporado culturalmente a Europa sino que se ha transformado en un polo de atracción. Durante el franquismo los pocos españoles que viajaban por Europa se sentían avergonzados por el hecho de pertenecer a un país no democrático y atrasado; ahora no solo viajan orgullosos por el mundo, sino que España recibe a multitud de europeos deseosos de estudiar en sus universidades. España es, de hecho, el país preferido por los estudiantes europeos, más de 40.000 alumnos extranjeros al año estudian en nuestras aulas.

## VI. Conclusión

Los destinos de España y Europa han vuelto a unirse, España se ha incorporado a ese proyecto de unificación europea de paz y bienestar económicos. Un proyecto que hoy se encuentra en un momento difícil, con el Brexit inglés, la inmigración y la crisis económica. Pero la Unión Europea sigue siendo un gran proyecto que ha cambiado a Europa y a España<sup>28</sup>. No solo ya no hay guerras entre europeos sino que también se ha modificado la función de sus ejércitos, que ahora son fuerzas de paz y de ayuda humanitaria.

Es cierto que el pesimismo español del siglo XIX, los 40 años de dictadura y el problema nacionalista catalán y vasco han dejado heridas en el alma española. La identificación de una parte de los españoles con España, su bandera, su himno y su cultura es menor que en otros países de Europa. Italianos, franceses, ingleses se sienten orgullosos de su historia, de su literatura, de su arte. Los españoles, en cambio, quizá no somos conscientes de todo lo que hemos aportado a Europa y al mundo: nuestra lengua es hablada por 500 millones de habitantes, España estableció el primer parlamento en Europa, llevó a cabo el Descubrimiento de América y ha dado al mundo el personaje universal de Don Quijote por citar solo algo de lo mucho con lo que hemos contribuido al desarrollo político y cultural del mundo. Los españoles, que hoy nos sentimos profundamente integrados en Europa, tenemos un gran reto: seguir siendo europeos, pero recuperando el orgullo de haber sido, y ser, una gran nación.

### Notas

- 1 BRUGMANS, H.: *La idea de Europa 1920–1970*, Ed. Moneda y Crédito, Madrid, 1992.
- 2 SUAREZ, L.: *Lo que el mundo le debe a España*, Ariel Barcelona, 2009, p. 7.
- 3 DE ROUGEMONT, D.: *Tres milenios de Europa: la conciencia europea a través de los textos*, Veintisiete letras, Madrid, 2007, p. 67.
- 4 De hecho, es en la Edad Media es cuando se más hace patente “el papel vertebrador del cristianismo”. AHIJADO QUINTILLÁN, M.: *Historia de la unidad europea*, Pirámide, Madrid, 2000, p. 47.

- 5 DE ROUGEMONT, D.: *Tres milenios de Europa: la conciencia europea a través de los textos*, op. cit., p. 65.
- 6 Ídem, p. 6.
- 7 Otro ejemplo es una obra teatral llamada *Europa* atribuida al Cardenal Richelieu (siglo XVII), escrita en el contexto de la Guerra de los Treinta años. En ella la princesa Europa es cortejada por el español, en la obra llamado el malvado Íbero, que quiere hacerla suya, pero Europa rechaza sus proposiciones alegando que Íbero ya ha conquistado a su hermana América y pide ayuda para enfrentarse a él a valiente Franción, es decir, a Francia que la salvará y le garantizará la paz”. Cfr. GUTIERREZ CONTRERAS, F.: *Europa la historia de una idea*, Salvat, Pamplona 1987, p. 42.
- 8 En AYLLÓN, JR.: *Los Pilares de Europa, Historia y Filosofía de Occidente*, EUNSA, Pamplona 2013, p. 131.
- 9 ROMERO POSE, E.: *Raíces cristianas de Europa*, San Pablo, Madrid, p. 194.
- 10 “Reyes y santos favorecen que por la arteria que une a Europa, los caminos, comience a circular la sangre vivificadora de la intercomunicación creadora de una *civitas* y *societas* armonizadas. La fuerza unificadora del Camino –Santiago y su tumba-es suficiente para crear e irradiar cultura, aquello que cultiva y engrandece al hombre. El culto a Santiago dignificaba los espíritus, Ídem, p. 182.
- 11 En España la Ilustración revistió un carácter particular por muchas razones, fundamentalmente porque a diferencia de otros países los ilustrados españoles eran profundamente monárquicos, es más el rey será en España el impulsor de las reformas acometidas en ese periodo. Cfr. PÉREZ FERNÁNDEZ-TURÉGANO, C.: *Las propuestas de los reformistas Ilustrados*, En *Reformistas y reformas en la Administración Española*, INAP, Madrid, 2015, pp. 14 y ss.
- 12 Sobre la idea de Europa en la Ilustración, véase VOYENNE, B.: *Historia de la idea europea, Historia de la idea europea*, Ed. Labor, Barcelona, pp. 91–110 y DE ROUGEMONT, D.: *Tres milenios de Europa: la conciencia europea a través de los textos*, op. cit., pp. 145–191.
- 13 Uno de los más conocidos es el de I. Kant en su libro *Sobre la paz perpetua*, Madrid, Alianza, 2002.
- 14 DE ROUGEMONT, D.: *Tres milenios de Europa: la conciencia europea a través de los textos*, op. cit., p. 176.
- 15 Ídem.
- 16 Por ejemplo en 1860, el 85% de la población adulta era analfabeta Cfr. GARCÍA DE

- CORTAZAR, F y GONZÁLEZ VEGA, JM. *Breve historia de España*, Alianza ed. Madrid, 2015, pp. 426.
- 17 UNAMUNO, M.: *Vida de Don Quijote y Sancho*, Alianza Ed., Madrid, 2004.
- 18 Esta frase muy conocida y citada proviene de un discurso de Ortega y Gasset pronunciado en Bilbao en 1910.
- 19 Cfr. ORTEGA Y GASSET, J.: *La rebelión de las masas*, Madrid, Alianza Ed. 1983.
- 20 El más importante fue el movimiento Unión Paneuropea creado por el Conde de Coudenhove-Kalergi, cuya madre, por cierto, era Japonesa, precisamente la intención de ese movimiento es la de unir a los Estados Europeos mediante vínculos federales. En 1926 se celebra el primer congreso Paneuropeo. A este movimiento europeo pertenecieron personalidades tan importantes como Freud, Einstein, T. Mann, Unamuno, Ortega, Madariaga, Adenauer.
- 21 Se trata del Congreso de la Haya de 1948 convocado por los movimientos federalistas del periodo de entreguerras. La idea era crear los Estados Unidos de Europa. No se conseguirá, pero ya entonces los europeos tenían claro que sin la unión europea no habría paz. Lo expresa muy gráficamente el Presidente del Consejo francés Paul Ramadier que termina su discurso ante el Congreso afirmando “¡Europa o Muerte!”. Cfr. MARTÍN DE LA TORRE, V.: *Europa, un salto a lo desconocido*, Ed. encuentro, Madrid, 2015, p. 27.
- 22 En el clima de bipolarismo que se instaura tras la II Guerra Mundial, Europa se siente amenazada por la URSS. Diversos Estados se unen para asegurar una defensa común, pensando que ese vínculo defensivo puede llevar a una futura integración política. Surge así en 1954 la UEO (Unión Europea Occidental) como intento de crear una defensa europea de Europa, sin embargo este propósito fracasará ante la creación en 1949 de la OTAN.
- 23 Lo más importante de esa primera Comunidad es que está basada en una nueva idea de integración. El elemento de cohesión va a ser el establecimiento de unas bases económicas comunes; el primer paso, pues, será la integración económica. A este nuevo método se le conoce como funcionalismo y se traduce en que, como afirma R.Schuman en su declaración del 9 de mayo de 1950, Europa no se hará de golpe sino a través de realizaciones concretas empezando por la puesta en común de la producción de carbón y de acero; esas realizaciones llevarán a cesiones sucesivas de soberanía en ámbitos concretos a favor de organizaciones supranacionales; la puesta en común de esa soberanía creará los cimientos de una Federación Europea última etapa del proceso.
- 24 ADENAUER, Konrad, *Memorias 1945–1953*. Ed. Rial, Madrid 1965, p. 99.

- 25 Sobre esta etapa histórica desde el punto de vista de la progresiva incorporación de España a Europa, cfr. VILLAR, F.: “Del aislamiento a la influencia en 20 años”, *Política Exterior*, vol XX, mayo/ junio 2016, nº 171. p. 129.
- 26 En relación con la interpretación de este modelo de estado Véase BREY BLANCO, *Ideologías, transición política en España y Constitución*, ADI Madrid, 1998.
- 27 [http://ec.europa.eu/spain/actualidad-y-prensa/noticias/asuntos-institucionales/treinta-aniversario\\_es.htm](http://ec.europa.eu/spain/actualidad-y-prensa/noticias/asuntos-institucionales/treinta-aniversario_es.htm)
- 28 Cfr. VILLAR, F.: En cuanto a España, en estos treinta años ha pasado “del aislamiento a la influencia internacional de ser un paria internacional a convertirse en actor relevante en los escenarios privilegiados y prioritarios de su política exterior” Del aislamiento a la influencia en 20 años”, *Política Exterior*, vol XX, mayo/ junio 2016, nº 171. p. 136.